

〈松村誠一先生追悼〉

旧備前・池田藩士の末裔

— 松村誠一先生を偲びて —

第十一回(昭和三十七年度)卒業生

谷

是^た

水任流の達人

奥様・松村滋子さんの名前で、松村誠一先生のご逝去の知らせを受けたとき、ただ愕然とした。しかも
当人の意志により、一切を密葬で済ましたとあり、葬儀後の連絡であつたので、思ひは複雑であつたが、
一面、自己に厳しい方だつただけに『いかにも先生らしいご最後だ……』とも考えた。心ばかりの供花料
を後送したが『五十日祭と納骨』を『生前の希望に従い、モーツアルトの戴冠式、旧制第六高等学校、旧
制高知高等学校の校歌、寮歌の中でとり行いました。葬儀の日も五十日祭の折も、雲一つなく穏やかに暖
かい日でございました』という挨拶状をいただいた。九十一歳であつた。

“自由の空に寄す南溟の、永遠なる浪の響き”

壮年期、二十五年もの間、南海の土佐の地で国文学を講じ、愛してやまなかつた校歌を流して、自分を
送つて欲しいと言ひ残された、先生の心情を憶うにつけても、ただ眼頭が熱くなるのを覚えるのであつた。

先生は大正二年七月六日、岡山県にお生れになつた。代々備前池田藩士の家で、尊父見二氏は安田銀行

の銀行家。支店長として玉島、高松、尾道、広島、岡山などを廻られた方であつたらしい。私が高知新聞社の高松支社に勤務している時、自分も少年期に高松に居たよと、当時の番町や「広場」と称する停留所のことを懐かしそうに話されたことがある。中でも大的場の海水浴場では、高松藩伝来の日本古式泳法・水任流で鍛えられたと言われた。私の学生時代、朝倉にプールが初めて完成したが、「プール開き」に先生は水任流を披露したことがある。亀岡利治講師（当時）などと、あの長身の先生が額へ扇子を結び、一滴も濡さず、またお盆を片手にそえて水面をスル／＼と泳ぐ様を、私はプールの一隅に坐して眺めていたものだ。その姿は、昨日のように鮮やかに脳裏に残っているから思えば不思議なことである。

池田亀鑑の元で

旧制第六高等学校（岡山）から東京帝国大学文学部国文科に進まれた先生は、当時の一流の国文学者・近世文学の藤村作、国語学の橋本進吉、上代文学の久松潜一、中古文学の池田亀鑑、俳諧文学の志田義秀（講師）などに学んだが、芭蕉研究の井本農一、後に小説家になった本県出身の田宮虎彦らとも同期であつたらしい。田宮の若き学生の頃の話の一度うかがつたことがある。

なぜ先生が国文学を志望したか。それは姉君の松村緑氏の影響があつたのではあるまいか。明治四十二年に生まれた、先生から四歳上の緑氏は、東京女子大学国語専攻部と旧制東北帝国大学法文学部国文学科を卒業、東京女子大学に永く教授として勤められた方で、薄田泣菫、蒲原有明、石上露子、三木露風など近代詩人の研究で有名な国文学者であつた。『薄田泣菫考』という大著もあり、私も誠一先生から一冊記

念にいただいている。この二人は長身の上、風貌もよく似ておられたとみえて、ある時、二松学舎の萩谷朴氏が研究発表の後、誠一先生が来ておられると近寄ってみると、女性だったので驚愕したという話は、長野誉一の著「学者評判記―国文学」（有朋堂）でユーモラスに紹介されている。

誠一先生は東京大学では『堤中納言物語攷』という卒業論文を書かれた。岡山の池田侯爵家の池田文庫の蔵書を父君の縁で閲覧できた理由によるが、これがそのまま、後に卒業後助手としてつかえた池田亀鑑博士の著作として、松村先生了解の元に出版されているようだ。先生は大学院を卒業後、昭和十一年から十七年まで博士の助手として『校異源氏物語』などの多くの仕事を手がけられたが、そのかたわら山形高校講師、二松学舎専門学校授業嘱託、文部省図書館講習所講師などを果され、昭和十七年三月三十一日、旧制高知高等学校教授として任官されたのである。時に二十九歳であった。

動乱期の中で

時の校長は『徒然草』の研究者で、文部省督学官から第七代目として就任した佐野保太郎であった。久松潜一の紹介で知遇を得たのである。当時の社会情勢というと、日米開戦の直後で、勤労働員、学徒動員が始まり、学校も学生も、国民総動員の国家体制にあった。当時、松村先生は高知市西町に居住していたと聞いたが、やがて昭和二十年七月四日、高知の大空襲により学校は全焼、南溟寮の一部を残して、灰燼に帰した。

その日から阿部孝、蒲原稔治、沢村武雄、徳田弥、八波直則ら旧制の校舎再建の運動と苦闘が

始まるが、若い松村先生ももとよりその一人であった。石津純道先生も翌二十二年二月に関西方面から赴任したが『高知も空襲に会ったと聞いたが、辞令は出ているし、行ける所まで行ってみようと思つて高知駅に立った。焼け跡をたどつて学校まで行つたが、そこには学校も焼けて無く、ただ途方に暮れましたよ』と後年語られたことがある。すべてはそのような按配であつたのだ。

旧制校舎再建から新制大学設置までの苦勞した経緯は、松村先生は自分の手帳や控えを基に『高知大学の三十年』の中で『大学設置申請の前後』として詳しく書かれている。それは短文ながら実に綿密で、実証的で、資料に厳しく考証した文章で、これを見ても松村先生の学者としての一字一句を疎かにしない側面が十分にうかがえると思う。

附属図書館の基盤造り

昭和二十四年、新制高知大学は発足した。文理学部文学科国文学専攻は、東京大学の四年先輩で、中世文学の石津純道と松村誠一先生を中心に、石津先生の旧制沼津中学時代の同僚で近世文学の片岡一義（土佐人）、万葉学の小関清明（同）、中国文学の荒木修といずれも東京大学出身者で固め、当時としては鉄壁の陣容を築かれた。松村先生は中古の『源氏物語』や王朝日記文学を担当し、同時に国語学、図書館学の分野の講義をなさつたが、主として学科の諸問題は石津先生が受け合い、先生は講義の他に永く附属図書館長を兼務され、同館の基盤造りに尽力されたのである。無論、交通の不便な時代、再三文部省主催の講習会や他大学の見学などを重ねられ、帰県しては職員の指導、予算の獲得に尽瘁された。小津の学舎時

代の図書館は一部レンガのような木造の小さいものであったが、自由に本が読める感じの良い雰囲気があり、親しみやすかった。陰には松村先生らの努力があったのである。

私達の学生時代には前記の先生方の他、教育学部には近代文学の岡林清水、近世文学の宇和川匠助、方言学の土居重俊、国語学の吉野忠、漢文学の村上徳美先生らがおられ、それぞれ受講すれば単位になった。だから教授陣が薄いという感じは、少しもなかったのである。

頭上のバリトン

私は松村先生の講義は『源氏物語講読』と『国語学概論』を受けたが、あの長身で教壇の上からよく透るバリトンの声で、頭上からかぶさって来るような、明快な講義で、眠ろうにも眠る余地がないものであった。さしもの美貌と知性に溢れた光源氏も、寄る年波に衰えて行く過程や、柏木、薫ら若手の公達の台頭、多くの姫君達の個性、特徴を巧みな表現により描き分ける心理描写と人間模様を、目の前で拡げるように語られるし、例えば『ろうたし』という語句の解釈などを加えながら、微妙に展開するストーリーと王朝の世界は、現代小説にも通じる男女の世界でもあるような気がしたものである。それも池田亀鑑の助手時代の永い蓄積があつてのことで、当時、高知女子大学の竹村義一先生と共に高知では源氏や王朝文学を語ることで、数少ない方であつた。

先生の学問的業績については、門外になり下つた私には、語る資格は全くない。朝日古典全集『堤中納言物語』や久松潜一編『日本文学史』の中の『堤中納言物語』（至文堂）、『古典文学鑑賞講座』（角川書

店)の『更級日記』などがあり、その他膨大な論文や論考があるはずである。私が後年寄贈を受けたものでは角川書店の『鑑賞・日本古典文学・第10巻・王朝日記』には『更級日記』の総説と口訳、注釈を付けておられる。さらに一九九三年に出版された随筆『桃李有言』にも源氏物語に関する数編の論考と、先生の研究の足跡が語られているが、実に感じの良い上品な著作となっている。

先生は道理と筋を通すことを重んぜられる方であった。時には誤った言葉には厳しく一言を発せられた。しかし一面では真に生徒思いの方で、自宅ですき焼きコンパを開き、奥様共々、貧しい学生達と車坐になつて胸襟を開き、時の補導学生達の楽しい一時ひとときをつくつて下さつた。テニスの愛好者でもあつた先生は、晩年までラケットを握り、運動部の学生達にも愛情を注いだ。

私は中学時代に父を失い、貧乏な学生であつた。先生はそれを心配して、何かと勉強ができるように措置を下さり、就職の心配までして下さつた。その高恩ははかりしれない。

昭和四十二年三月、土佐から去られると聞いた日、島崎美智さんと一緒に小津の官舎へうかがつた。先生は淡々とその心境を吐露され、『今まで老母(澄)を姉(緑)に預けたままにしてしまつて、僕は一人で土佐へ来て、勝手なことをして来た。しかし姉も相当に歳をとり、先の短い老母にも、これ以上孝養を尽くせないことは、許されることではない。それに旧友の井本農一君から今度成蹊大学が文学科を開設することになり、成瀬正勝、神田秀夫と君と三人でやって欲しいという話が来た。井本君の旧情もうれしいので決心した次第です』と言われた。なにしろ二十五年間の高知在住だから去るといささかの感慨もおありだろう。あの日の先生の表情と言葉も忘れられない。

土佐を去られた先生は、成蹊大学で主任教授十二年、特任教授三年、非常勤講師を七年続けられたから、真に国文学一筋であった。

私はその後東京都三鷹市井口のご自宅へ四回ばかりおうかがいしたことがある。時には女房、子供二人を連れて参上した。その都度昔変らぬ姿で、懐しく土佐の時代の話をされて応接されたが、『いやあ、もうこの歳になると新たに蓄積もできないから、昔、仕入れたものをテープレコーダーのようくり返してしゃべっているだけだよ』と笑われたりした。しかし、この五年程前からはさすがに体が弱られ、目も大変に不自由になり、もうこのような老残の姿を昔の教え児に見せたくない、応接も億劫になったから、わかつて欲しいという手紙をいただいた。先生の畏友成瀬正勝が晩年、時枝誠記の例を言い『病氣見舞いというものは闘病中の病人を苦しめるものだ』と言ったことを知って、先生ももつともだと思ひ、心配しながらも見舞に行かなかつたことを書かれています（『桃李有言』）。全く先生自身もそういうご心境であられたのだろう。

往事茫々とはいいながら、松村先生のごことは、一コマ一コマが意外に鮮明に残っている。とてもこの紙数では書き尽くせるものではない。いつしか、私も勉強もせず、ただの門外の老人となつてしまつたが、今考えてみると、泉下の先生には申し訳ない一生であつたと思うばかりである。石津先生といい、松村先生といい、あのような碩学が、当時、高知に居られたのだ。なぜもつと接触して、学ばなかつたのか。今では悔まれたりする。『人生、悔ばかり』ただ駄文を並べて、ひたすら先生のご冥福を祈るより他に方法がない。

〔参考〕「高知大学国語国文学会会報」三〇号

「高知大学の三十年」高知大学三十周年記念事業委員会

「桃李有言」松村誠一

「学者評判記上・国文学」長野誉一・有朋堂

「薄田泣菫考」松村緑・(株)教育出版センター

「高知、高知あゝ我母校・旧制高等学校五十年史」旧制高知高等学校同窓会

思い出すままに

第十一回(昭和三十七年度)卒業生

国政 孜郎

昭和三十四年、ペギー葉山が歌う「南国土佐を後にして」が全国的に大ヒットする中を、大きな夢と一抹の不安を抱きながら、岡山県北育ちの私は太平洋を望む高知を目指して、我が家を後にしました。岡山を經由して、当時の宇高連絡船に乗り、高松に渡り、急行列車「南風」を乗り継いで、ほぼ十時間の長旅でした。そのため、冬休み明けはまだ朝薄暗い時間に家を出て、下宿に着く頃にはもう日が暮れかかっていました。